

主 題：主の栄光のために生きる信仰者と罪

聖書箇所：随所

テーマ：なぜ主の栄光のために生きる私たちの歩みに教会/兄弟姉妹が欠かせないのか？

これからみことばを一緒に見ていきますが、その前に少し、先週学んだことを思い出してみてください。私たちは前回コロサイの3章、特に17節を通して、「すべてにおいて主の栄光を現す者として生きていく」ということを改めて考えました。いやいやながらも、強いられてでもありません。偉大な神様への心からの感謝を動機として、私たちはどこにいても、だれといても、何をしても、何を話していても、どんな状況にあったとしても、主イエスの名によって、すべてを成しながら歩いていこうとするわけです。そんな歩みこそ、私たちひとりひとりに与えられた神様からの大きな責任であって、また最高の特権でもありました。でもご存じの通りこの歩みというのは、たったひとりだけの孤独な歩みでもありません。神様はご自身の大きな愛によって私たちに兄弟姉妹を与えてくださいました。同じように主を愛して、主の栄光を現す者として生きていきたいと願う、そんな教会を備えてくださったのです。かつてイギリスで活躍した牧師スポルジョンは、この教会に関してこんなことばを残していました。「教会は完璧な人々のための施設ではありません。教会は恵みによって救われた罪人たちの避け所、神の愛しい子どもたちが養われ、たくましく育つ託児施設です。教会はキリストの羊の囲いであり、キリストの家族の家です。教会は地上で最も愛すべき場所なのです。」（チャールズ・スポルジョン）まちがいなくスポルジョンは教会の大切さというものをわかっていました。彼は、神の家族が信仰者の歩みにとって必要不可欠であるということをよく理解していました。

では、果たして私たち自身は今、神の家族や兄弟姉妹の存在が自分にとって必要なものであると、どれだけ考えているのでしょうか？果たして地上で最も愛すべき場所として教会を思っているのでしょうか？「もちろん自分にとって愛する場所です。」と即座に言われる方も中にはいるでしょう。でも正直に「いや、はっきりそう口にすることはできません。」と言う人も中にはいるかもしれません。確かに教会は完璧な人々のための施設ではありません。罪の問題を抱える人々の集まる場所であるからこそ、いろいろなかたちで問題が生じることがあります。そして実際にこれまでの歩みにおいて、教会のいろいろな問題や罪を見てきた結果、教会に行くことにためらいを覚えてしまう人もいたりします。問題を抱える兄弟がいれば、その人からできるだけ距離を取ろうとする人もいるかもしれません。私たちはみな自分自身の罪の問題だけで大変なのに、ほかの兄弟姉妹の問題に思い悩むということが嫌になって、ほかの人の罪の問題を見て見ぬふりをしようとしていたり、いや私はひとりで大丈夫、神の家族は私にはもう必要ないと考えている人もいるかもしれません。でも改めてきょう皆さんと一緒に考えたいこと、改めて皆さんに覚えていてほしいこと、それは、私たちが神様の栄光を現す者として罪に勝利しながら歩いて行こうとするなら、私たちには絶対に兄弟姉妹が必要になるということです。いやもっと言うなら、神の家族が互いの間で罪を正しく取り扱うという、そんな愛が、私たちの歩みには欠かせないものになります。でも、今のを聞いて、えっ、愛ですか？と思った方がいるかもしれません。互いの間で罪を正しく取り扱うと聞けば、私たちはすぐに、いったいそのどこに愛があるのか？と思うわけです。

この朝皆さんと一緒に考えたいのは、まさにこの点についてです。主の栄光のために生きている信仰者たち、私たちひとりひとりが互いに罪を正し合うということを通して示すその愛というものについて、きょうはいろんな箇所を見ていきますが、特にマタイ18：15-17を通して、みことばを考えてみます。この箇所から私たちは、なぜ私たちが互いに罪を正しく取り扱うということが愛と言えるのか、大きく二つの理由を考えてみたいと思います。そして皆さん、私たちがどうして互いの罪を正しく

取り扱うのが愛なのかということを理解すれば理解するほど、私たちは確実に教会を、神の家族を愛する者として成長したいと願う者になるはずです。ですから一緒に神様のことばに耳を傾けてみましょう。まず一度お読みしますので15節からよく見てください。

#### マタイ18：15－17

「:15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。:16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。:17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」

#### 1. 罪は小さな問題ではないから 17節

では、まず一つ目の理由から考えてみましょう。なぜ、私たちが互いに罪を正しく取り扱うということが愛なのか、その理由は「罪が小さな問題ではないから」です。「罪は小さな問題ではありません。」「罪は私たちにとって深刻で危険な問題です。」と私たちが聞くと、多くの人は思うでしょう。確かにそのとおりです。私たちは確かに知識としてはそのことを知っています。でも、私たちのその知識と私たちの歩みは、実際に結びついているのでしょうか？果たして、みことばが示すのと同じ深刻さでもって私たちは罪を覚えているのでしょうか？聖く正しい神様がご覧になっているように、果たして私たちは罪を見ているのでしょうか？残念ながら、私たちは時に罪の恐ろしさを忘れてしまうことがあります。そしてその結果、まるで罪を大したことの無い問題かのように扱って、たとえそのまま放置していたとしても何の問題も起こらないと思い込んでいたりするのです。初めに言えるのは、決してそうではないということです。神様の前にどんな小さな罪であったとしても、全く問題がないものは一つとしてありません。そして改めてそのことを正しく覚えるために、普通なら15節から順番に見ていきますが、きょうは先に終わりからみことばを見てみましょう。

まず17節を見てください。イエス様はこのように言われていました。「それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」後で詳しく見ますが、ここには罪を犯した信仰者がその罪を指摘されて、それでも頑なに悔い改めることを拒めば、その結果起こることが教えられていました。罪から立ち返るのではなくて、罪のうちを歩み続けていくような選択をするのなら、その者の最後に待っていたものは、異邦人が取税人のように扱われる、ということだったのです。これを聞いても今の私たちにとってはぴんとこないかもしれません。でもこの当時、たとえば異邦人というのは、ユダヤ人社会の中で疎まれていたような、完全に相入れない存在でした。また取税人というのは異邦人以上に人々から嫌われていました。裏切り者として軽蔑されている存在だったのです。それは彼らが敵であるローマ帝国に仕えて、同胞のユダヤ人から税金を取り立てていたからでした。まさに裏切り者であるそんな取税人と人々はいっさい関わりを持つとは思わなかったわけです。だからこそ、たとえば取税人のかしらであったザアカイ。ザアカイも、イエス様がザアカイの家に泊まることになったからと話をしていた時、その光景を見た周りの群衆たちが何と口にしていたか覚えています？ルカ19：7をよく見てみるとこう書いています。「これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言いつぶやいた。」周りにいた人たちはみな「イエス様は罪人のところに行った。」とつぶやきました。そう批難しました。そう不満をこぼしたのです。異邦人にしても取税人にしても、どちらも当時のユダヤ人たちにとって関わりをいっさい持つとしないような代表的な存在でした。そしてそんな存在を挙げて、イエス様はここで、悔い改めようとせず自らの意思で罪を犯し続けるような者を、「彼らのように扱いなさい。」と求めておられたのです。言い換えるなら「もし彼ら自身が自ら聞き入れないという選択をし続けているのであれば、そんな彼らを教会から取り除いてしまいなさい。」とそうイエス様が言われていました。同じ信

仰者との交わりの中からその人を外に追い出すようにと。それが頑なに主に逆らう者にふさわしい結果でした。もちろん勘違いしてほしくないのは、これは、その人物をただ辱めるためのものではないということです。言うことを聞き入れないそのような者に対して、人々が「この人はもうダメだ。」と忍耐を失って、怒りや不満のまま交わりから叩き出すではありません。こうして教会から除くというのは、その人物が自分の罪の深刻さに気づいて悔い改めて神様に立ち返るといふこと、神様の家族との交わりを再び回復するといふことが目的でした。叩き出すために叩き出すわけではなく、ただ再び交わりを回復するために、罪に気づかせるために外に出すのです。

でも、この箇所を多くの人たちが見るときに人々は思うのです。たとえそのようにして罪に気づかせるためでも厳しすぎます。悔い改めへと導く、それはすばらしいかもしれませんが。でも悔い改めに導くためであったとしても交わりから完全に除いてしまうといふのはあまりにもかわいそうではありませんか？…と。でも、もし私たちがこれを厳しいと考えるのなら、私たちは自分自身に問いかけてみなければいけません。私は罪の深刻さを本当に理解しているのだろうか。皆さん、確かに私たちは神様の罪に対する教えであったり、罪に対する命令であったり、また神様が罪に対してとられた実際の行動を見ると、あまりにも厳しいと感じてしまうことがあります。でも多くの場合、私たちが、神様がどれほど聖くて、どれほど罪を忌み嫌っておられる聖なるお方であるかといふことを、忘れてしまっているのです。

ここで少し一緒に思い返してみてください。神様は歴史において、ご自分の民や教会の罪というものをどのようにして扱ってこられたのでしょうか？たとえば旧約時代はどうですか？エジプトから助け出されたイスラエルの民はどうでした？エジプトから助け出されたイスラエルの民は、神様を信じようともせず、何度も何度も逆らい続けていました。その民はどうなったか？民数記32：13にこんなふうに書いていました。「【主】の怒りはイスラエルに向かって燃え上がったのだ。それで【主】の目の前に悪を行ったその世代の者がみな死に絶えてしまうまで彼らを四十年の間、荒野にさまよわされた。」正しい主の怒りが燃え上がったその結果、どうなったか？彼らは40年もの間荒野をさまよいつづけることになりました。神様のそのような怒りは、旧約を見ればいろんなところで見て取ることができます。では、新約の時代はどうでしょうか？たとえば使徒5章に登場していたアナニヤやサツピラはどうだったか覚えています？使徒の5章で、あのペンテコステの日以降誕生した新しい教会といふものは成長し続けていました。人々は自分たちが持っている持ち物を売って、そしてともに集い、互いの必要のために仕え合っていたのです。そうして教会は成長していこうとしていました。しかしそんな中であって現れたアナニヤとサツピラは持ち物を売り払った代金の一部を手元に残して、でもすべてをささげたかのように偽って使徒の前にそれを置いたのです。周りの者から称賛されたい、自分たちがよく思われたいとそういう思いで教会を、何より彼らは神様を欺きました。その結果どうなったか？使徒5：4-5にこのように記されていました。「:4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」:5 アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常な恐れが生じた。」と。サツピラも後で同じでした。アナニヤもサツピラも罪の結果、死にました。聖なる神様はどの時代においても、罪をよしとはなさらなかったのです。こうして教会の始まりにおいて、主ご自身は、ご自身が罪をどれほど忌み嫌っておられるのかといふことを、はっきり明らかにされました。人々はそれを見てそれを聞いて、非常に恐れたのです。またもう一つ、教会の始めがそうであったように、続けて成長していたコリントの教会はどうでしょうか？言うまでもなく皆さんがよくご存じの通り、コリントの信仰者たちは数多くの問題を抱えていました。たとえば彼らのうちには不品行の問題も横行していたのです。Iコリント5：1にこんなふうに記されています。「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。」また不品行だ

けではありません。それに加えて彼らは主の晩餐に関しても問題を抱えていました。主の晩餐に集まってくるときに、ほかの兄弟姉妹のことを軽んじていただけではなくて、自分自身をきちんと吟味することもないままにそれに預かって、主のからだと血に対して罪を犯すような者もいました。では皆さん、そのような者に対して、神様はいったいどのようにして報いられたのか？ I コリント 11 : 30 にこうあります。「**そのために、あなたがたの中に、弱者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。**」と。罪を犯した者に対して、神様は厳しい懲らしめを与えておられました。それによって亡くなった者が大勢いたというのです。

こういった箇所を読むときに、私たちはこんなふうに考えることがあるかもしれません。これは当時の話でしょう？今の私たちにはもう当てはまりません。…と。でも果たしてそう言い切れるのでしょうか？私たちは「絶対それはありえない。」と言い切れるのでしょうか？もちろん救われた信仰者がその救いを失うことはありません。再び罪の罰にあうことももちろんありません。みことばがはっきりと約束してくれていたのです。ローマ 8 : 1 にも「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」私たちはこの約束を持っているのです。揺るがない希望を持っているのです。イエス・キリストにある者は、もう罪に定められないのだと。でも同時に、罪といっさい関わりを持たない聖く完全な神様は、ご自分の子どもたちが罪から離れるようにと、愛のゆえに懲らしめを与えることもある、とみことばは教えていました。だからこそ皆さん、私たちは忘れてはいけません。イスラエルの民、アナニヤ、コリントの人たち…その罪に厳しく報いられた聖なる神様のご性質は、昔も今も変わっていないということです。いっさい変わっていません。だからこそ、私たちはどんなときも罪を軽く考えてはいけません。罪は小さな問題ではありませんでした。かつてスポルジョンもこんなことばを残しています。「罪が小さなもの？毒ではないのか？誰がその猛毒性を知っているのか？ブドウ畑を荒らすのは子狐ではないか？艦隊を難破させる岩礁を築くのは小さな珊瑚虫ではないか？大きな樫の木を倒すのは小さな打撃ではないか？石をすり減らすのは絶えず落ち続ける水滴ではないか？罪が小さなもの？それが救いの頭に茨の冠をかぶせ、その心臓を貫いたのだ。それが彼を激しい苦痛とつらさ、悲哀で苦しめたのだ。最も小さな罪も永遠の天秤で測る事ができるなら、あなたは蛇から飛んで逃げるようにその罪から逃げ、わずかな悪の現れさえ忌み嫌うことだろう。全ての罪を救い主を十字架につけた罪として見れば、どんなにそれが罪深いものであるかが分かるだろう。」と。たとえどんなに私たちには小さく思える罪であったとしても、聖なる神様の前にそれは深刻な問題でした。神様が罪を厳しく扱われるからこそ、神様によって救われた私たちも、罪を正しく扱おうとするのです。

ここで皆さんちょっと立ち止まって考えてみてください。私たち今、聖なる神様が罪を厳しく扱われることを見ました。時に懲らしめさえ、愛のゆえに与えるお方だということを見ました。神様の前に罪は小さな問題ではないということを見たわけです。では果たして、当時の信仰者たちはそのことを知らなかったのでしょうか？コリントの教会の人たちは何にも知らなかったから異邦人でさえしないようなそんな大きな不品行の罪を犯すようになったのでしょうか？いいえ、そうではありません。彼らが抱えていた深刻な問題が、さっき触れた I コリント 5 : 1 の続き 2 節にこんなふうに記されています。「**…それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。**」彼らが抱えていた問題が何かわかりますか？言うまでもなく不品行は大きな問題でした。でも同時にそれを目の当たりにしていた周りのコリントの信仰者たちは、その罪を犯している者の罪を戒めることもなければ、悲しんで自分たちのうちから取り除こうともしなかったわけです。いやむしろ彼らはその罪を見て見ぬふりをしただけではなく、誇り高ぶっていました。ここで覚えておくべき大切なことがあります。皆さん、もし私たちが、罪が深刻な問題であると知っていながらその罪をそのまま放置しておくのなら、その罪は神の家族のうちに蔓延し、より深刻な問題をもたらすことに繋がるということです。聖さを保つべき教会が、いろいろな理由でもって罪を

妥協してそのまま放置し続けていくなら、個人の歩みだけではありません。教会全体に影響及ぼすことになるのです。だからこそ、私たちは罪というものを互いに正しく取り扱うことが必要でした。

皆さん、私たちが見てきたように、罪がいかに深刻なものであるのかということを考えてときに、自分たち自身がその罪を正しく吟味しようとするだけではありません。私たちの周りには愛する兄弟姉妹がその深刻な問題を抱えているのなら、その罪を正しく取り扱ってあげようとするのです。自分自身に心配をかけるのと同じ思いでもって、同じ危険に瀕しているその兄弟姉妹のことを気にかけてあげようとするのです。どうでしょう？果たして私たちはまず自分自身が、罪を深刻な問題であると考えているでしょうか？もし「考えている」と言われるなら、では私たちは自分のうちに見て見ぬふりをしていいる罪はないでしょうか？「どんな小さな罪も深刻な罪だとそう信じている」と言うなら、私たちが放っておいて問題ないと無視しているそんな罪が私たちのうちにはないでしょうか？そして同時に、自分だけではありません。ほかの兄弟姉妹の罪を見て、それを見て見ぬふりをしてはいないでしょうか？ある人のうちに根付いてしまっている罪を私たちが認めていながらも、その人に嫌われたり、関係が壊れてしまうということを恐れて、そのままよしとしていないでしょうか？皆さん、罪を互いに正しく取り扱っていくというのは、ほかの人をさばくのが目的では絶対にありません。自分の正しさを人に押し付けるためにそれをするのでもありません。ただ同じ神の家族として生きている私たちが、罪の危険を忘れてその道に突き進んでいる者がいかにそれによって苦しむのかということに心を痛めるからこそ、それが私たちにとって大きな問題であるからこそ、愛でもってその罪を正してあげようとするのです。私たちがいかに深刻な問題であるかをわかっているなら、私たちは自分だけではなく、ほかの兄弟姉妹の罪の問題をも正しく取り扱おうとするのです。パウロはこんなふうにも言っていました。I コリント 12 : 26 「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」キリストによって罪を赦され贖われた私たちというのは、もはや自分のために生きているのではありませんでした。私たちはみな同じキリストのからだの一部として神様の栄光を現すために生きているのです。私たちはともに生きているのです。そしてその中であって、罪のもたらす影響が深刻なものであると知っているからこそ、私たちは自分自身が罪を吟味し続けるだけではなく、同じ神の家族として互いに危険から守ってあげよう、私のことも守ってね。でもあなたのことも私は守るよ。そのようにして罪があるならそれに正しく向き合いながらともに歩んでいこうとするのです。深刻な問題だとわかっているから、だから愛を持って正しく向き合うわけでした。それが一つ目の理由でした。

## 2. 兄弟の悔い改めを心から願うから 15-17節

次に二つ目です。なぜ私たちが互いに罪を正しく取り扱うことが愛なのか、その二つ目の理由は「兄弟の悔い改めを心から願っているから」です。それは危険を知っているからだけではありません。兄弟姉妹のその悔い改めを私たちが心から願っているからです。神様の栄光が現れるということ、ほかの兄弟姉妹が神様に立ち返ることを何よりも願っているからこそ、私たちは愛のゆえに互いに罪を戒め合おうとするのです。そしてイエス様はこの具体的な方法に関しても、私たちが罪を正しく取り扱っていく上でどのようにして私たちがそれを成すべきなのかも、このマタイ 18 : 15-17で教えてくださっていました。15節に戻って具体的な方法を考えてみましょう。15節からイエス様はこのように言われていました。「:15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。:16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。:17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」

さて、ここに私たちは特に四つのステップを見て取ることができます。深刻な罪から兄弟姉妹を助け出すために、イエス様ご自身が定めておられた手段でした。どのようにして私たちは罪に陥っている愛する兄弟を助けてあげるのか、その四つの手段がここには描かれていたのです。では、具体的にどんなステップだったのでしょうか？

まず一つ目のステップは、一対一でした。15節を見てみるとこう書いてあったのです。「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。」ここで皆さん、よく考えてみてください。イエス様は、兄弟姉妹が罪を犯した場合に触れていましたが、では兄弟が罪を犯したそのとき、いったいだれがその兄弟の罪を戒めてあげる責任を負っていると言われていました？それはほかのだれでもない、あなたでした。もし兄弟姉妹が罪を犯したのを見るなら、彼らが私たちに対して罪を犯したのなら、その罪に気づいた私やあなたがその人のところに行って個人的に罪を知らせてあげる必要があるというのです。でもこれを聞いて多くの人は思うのです。何を言っているのですか？相手が先に私に罪を犯したのなら、相手が私のところにやって来るのが当然でしょ？！どうして私が行かないといけないのですか？！…と。覚えておかないといけないのは、イエス様はここで「行って」「責めなさい。」という二つことばを使っておられましたが、この二つのことばのどちらにも、命令形を用いておられたということです。要するに、罪を犯した者のところに「行く」というのも、その問題を「取り扱う」というのも、ただの提案ではなかったのです。私が今言っているのでもありません。これは主イエス・キリストご自身から私たちと与えられた大切な責任だというわけです。だからもし私たちが、兄弟姉妹が罪を犯しているのを目の当たりにするなら、私たちがその人のところに自ら行って、みことばから罪に気づかせてあげるのです。「兄弟、今あなたがしていることは正しくありません。私の意見や考えを言っているではありません。神様のことばに照らし合わせたときに、あなたは確かに従っていません。」と。先にも触れましたが、ここで鍵になるのは「ふたりだけのところ」というこのことばでした。皆さん、イエス様はここで「もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、まず長老や執事に連絡しなさい」と書いていました？書いていませんでした。「自分の友人にまず伝えるように」と口にしていました？口にしていませんでした。「耳を傾けてくれるだれかのところに行って祈禱課題としてシェアしましょう。」などということも言われてはいませんでした。そうではなく、まずは二人だけ、一対一で罪に気づかせてあげることが求められていたのです。でもどうしてだと思いませんか？なぜ最初から公にしてほかのだれかを巻き込もうとしないのでしょうか？なぜでしょう？それは、こうして罪を戒めるというのが、相手を辱めたり、必要以上に傷つけることが目的ではないからでした。私たちは愛する神の家族のひとりが神様に立ち返ることを何よりも願っているからこそ、必要以上に公にしようとはしません。罪に陥っている相手に心を配ってあげて、その人が罪に気づいて悔い改めて神様に立ち返ることができるようにと、それを念頭に置いて最善の助けを与えてあげようとするのです。まちがいに言えるのは、これは自分自身の怒りや不満を突きつけるためのものではない、ということです。だれかが罪を犯しているのを見たときに、私たちが怒りに溢れて、「何やってるんですか！」と言って、罪を叩きつけるものではありませんでした。自分の正しさを押し付けるものでもなければ、自分の主張を明らかにして、相手に罰を与えるのでも、復讐をするためのものでもありません。まさにパウロは私たちが持っているべき態度をこのように教えていました。ガラテヤ6：1にこのように記されています。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。」と。「柔和な心でその人を正してあげなさい。」だれかの罪を戒めるそのとき、私たちは柔和な心をもって、罪を犯し正しい道からそれているその者が再び真理に帰ることができるように、助けてあげようとするのです。皆さん、それが目的でした。私たちの正しさを確立させるためではなく、神様から離れ、遠くへ行こうとしているその者が立ち返ることができるように。そのためにそのようにして一対一で罪を指摘しようとするのです。そしてもしその人がことばを素直に聞き入れて、神様の前に悔い改め

て立ち返るのなら、感謝なことにそれで終わりです。でももし聞き入れずに頑なにそれでも罪を犯し続けるのであれば、次のステップがありました。

二つ目のステップは数人でした。一つ目は一対一でしたが、二つ目のステップは数人でした。続きにこう書いています。「もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。」一対一で悔い改めない場合、次にすることは、あきらめることではありませんでした。「ああ、もうこの人は変わりません。もう仕方ありません。」と言って、私たちが手を引いていくわけではありませんでした。ほかにひとりかふたりを一緒に連れて行くのです。

でもいったい何のために、そのようにひとり、ふたりと数人を連れていくのでしょうか。二つの目的がありました。一つは、複数の目によって事実が確認されるためでした。少し考えてみてください。今の時代です。裁判などで用いられる証拠というものには、いろいろな科学技術が使われていたりします。DNA鑑定などいろんなものを用いて事実の信憑性を測ります。もちろんそのようなものは古代のイスラエルにはありませんでした。その代わりに彼らは何をしていたか？当時の彼らは複数の人たちを証人として用いていました。こんなことが申命記 19 : 15 に記されています。「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」当時の人たちはこのようにしていたのです。こうして旧約でも見られる基準をここでイエス様は適用されていました。つまり一対一で伝えたその内容というものが本当なのかどうかということを、今度は複数の人の目によって確認するように言われていたのです。でも同時にこれというのは、ただ事実確認をするためだけでもありませんでした。二つ目の目的は、複数の証人によって愛を持って悔い改めるように促し続けるためでした。たとえひとりがダメであったとしても諦めることはなくて、複数の兄弟姉妹が同じその罪を指摘するとき、罪を犯した者はみことばからの真理を繰り返し目の当たりにすることになります。自分の犯した罪が主の前にいかにまちがっているのかということさらさら知ることになるのです。あなたのしていることは確かに神様の前に誤っていますよ。みことばに従って悔い改めて主に立ち返りなさいと。そのようにしてひとりだけではなく、数人が柔和な心を持って、すでに正しい道からそれてしまっているその者を再び真理に立ち返ることができるようにと助けてあげようとするのです。そしてもし、その人がそのことばを素直に聞き入れて神様の前に悔い改めるなら、感謝なことにそれで済みです。でももしそれでも聞き入れずに罪を頑なに犯し続けるのなら、次のステップがありました。

三つ目のステップは、教会でした。続きにこうあります。17節「それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。」一対一で悔い改めない場合、数人で向き合っても悔い改めなければ、もう全部諦めてしましましょう、ではありません。変わらず愛を示し続けようとするのです。今度はその罪を教会に、言い換えれば、神の家族全体に告げることです。同じ教会に属している人々に対して、頑なに罪を犯し続けているその者の罪を伝えるのです。もちろんこれもその人のことを全体でばかにするためにするのは当然ありません。いろんな人たちに伝えて、いろんなうわさを流すためでももちろんありません。ただこれは、その人物の悔い改めというものを一緒にやって、ひとりだけではありません。数人だけでもありません。教会全体がその人の悔い改めを心から願って一緒に求めていくためでした。愛する兄弟姉妹が一刻も早くその罪から立ち返るということを教会全体として祈るためでした。たとえどんなにその人が拒まれていたとしても、危険な罪に陥り続けているその兄弟姉妹を助け出してあげるために、今度はみな熱心に訴え続けようとするのです。

でもこれでもなお、まだ頑なに悔い改めることを拒んで罪の中を歩み続けていくのなら、最後のステップは追放でした。17節こう続いていました。「教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」いつまでも罪を追い求め続けていて悔い改めようとしないのであれば、

その者は教会の交わりから追い出され、交わりから断ち切られるわけです。もはや兄弟姉妹としてではなく、異邦人や取税人として、つまり教会員としての祝福も得られないそんな部外者として扱うということです。そのような者を家に招こうとすることもなければ、食事を一緒にするというのももうしません。こんなふうにⅠコリント5：11、13にこのように記されています。「11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。」「13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」厳しいことばが書かれていました。でも、まさにこれが神様からのことばでした。もし自分自身で、私は救われていると考えている兄弟と呼ばれる者が、頑なに罪を悔い改めることをせず、罪の中を生き続けていこうとしているのなら——みことばの教えなんて関係ありません。私は私の願いのまま生きていきます。罪なんて小さな問題です、好き勝手に罪を追い求め生きていきます。——でもそれでいてなお「自分はキリストのために生きていく」なんてそんなことを口にするのであれば、教会ははっきりと言うわけです。「それは主の前に絶対に赦されません。悔い改めなさい。」と。非常に厳しいことばでした。でも皆さん、これも同じだということです。何が同じなのか？それは、私たちはただ頑なに罪を歩むその者に対してあきれて、憤りや失意などによって彼らを追放するものではありません。たとえどんなに辛く悲しい手段であったとしても、神様に逆らって悔い改めを拒んでいるその者が自分の罪の大きさに気づいて心が砕かれ、主に立ち返るのであれば、その人を愛するからこそ、その交わりを断とうとするのです。その人のことを考えるからこそ、その人の永遠を考えるからこそ、私たちは愛を持ってそうやって交わりを断とうとするのです。

このように考えてきたとき、四つのステップは確かにそれぞれすべて厳しいものでした。でもこれらはどの時点においても、単にだれかを除外するためにするものではありませんでした。そんな目的のために行うものではありませんでした。そうではなくてむしろ愛をもって罪を戒めて、罪に陥っているその者が悔い改めて神様に立ち返って、そして再び私たちと神様と交わりを回復するということが、その目的にあったのです。だからこそ皆さん、まさにこの生き方というものが、私たちが神の家族として互いに成すことのできる一つの具体的な愛のかたちでした。

そうだとすれば改めて一緒に考えてみてください。果たして私たちは教会を、兄弟姉妹を心から愛しているでしょうか？罪の恐ろしさを知っているだけではなくて、何より愛する神の家族の最善と成長を願っているからこそ、みことばに従って互いに罪を正しく取り扱おうとしているのでしょうか？15-17節を見ると、多くの人たちは、厳し過ぎると、これを無しにしようとするのです。でも私たちがこの箇所を見ると、イエス様の、神様のその愛をここに見て取ることができるのです。私たちは神の家族を心から愛しているからこそ、罪に陥っている者がいるのならその人のところに自ら行って、「兄弟姉妹、それは違うよ。」とみことばから責め、その罪と正しく向き合いながらともに歩んでいこうとするのです。それが二つ目の理由でした。

さて、きょう私たちは一緒に、互いに罪を正しく扱うということについて考えてきました。罪がひとりひとりにとって小さな問題ではないからこそ、また私たちは兄弟姉妹の心からの悔い改めというものを願い続けているからこそ、私たちは互いに罪を戒め合うことを実践しようとするのです。でもここまで聞いてきて、ある人は今思っているかもしれません。私には難しいです…と。私自身もこのみことばを考えると確かにその思いを持ちました。いろいろな理由を挙げて、兄弟姉妹のその罪をそのままにするという選択をしている人ももしかしたらいるかもしれません。——あの人私にひどいことをしたんだ。あの方は私の敵なんだ。あの方は私の愛やあわれみや忍耐というものを受け取るに値しないんだ。——そういういろんなことを考えて私たちは互いに罪と正しく向き合うことを拒んでいるかもしれません。



でもそんなときは忘れないことです。皆さん、私たちはもうすでに同じ愛を受けたからこそ、その愛を実践するということです。

考えてみてください。私たちが罪の中に死んでいた時、救いの御手を差し伸べてくださったのは神様でした。私たち自身が罪深さに自分自身で気づいたのではなく、神様が私たちの心の内に働いてその罪深さを気づかせてくださいました。私たちが自分の行いによって救いを手にしたのではなく、神様が値しない私たちに、キリストにある罪の赦しを恵みによって与えてくださったのです。ほかのだれでもない神様が私たちを探し出してくださり、神の家族として生かされている今もなお変わらず同じ神様が、もし私たちが道から迷い出るようなことがあればいつも探し出し、いつも守ってくださるのです。だからおもしろいと思いませんか？イエス様は15-17節を確かに語っておられましたが、その前にこんなことばを残しておられました。これを見て最後にしましょう。少し戻って18:12-14まで見るとこう書いています。「:12 あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。:13 そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。:14 このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。」と。皆さん、私たちが自ら進んで互いの罪を正しく扱おうとするのは、この神様の姿を私たちが明らかにするためです。罪によって道に迷っているその者を探し、手を差し伸べようとし、愛を示そうとするのは、私たちがそれをもう受けたからです。私たちが互いに罪を正しく扱おうとするのは、私たちに示してくださったその神様の愛を私たちが証しするためです。だからこそ皆さん、どんなに困難や犠牲が伴ったとしても、罪の危険性を覚えて、互いに罪を正しく扱いながら、愛を持ってともに歩んでいきましょう。それが、神の家族とされた者の生き方でした。そして、だからこそ私たちが最も愛することのできるものは、“教会”でした。みことばを覚えて、ともに歩んでいきましょう。